2025年9月10日・12日　水曜祈り会・金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「ヨルダン川を渡る」　テキスト:ヨシュア記3章1-17節（参照4:1-9）

【理解の手がかりとして】

ヨシュア記は2章から11章にかけて「カナン征服」のテーマが展開される。本課の3章はその最初の「エリコ攻略」（2-6章）の一部分である。ちなみに、2章にはイスラエルのエリコ攻略成功の鍵となるラハブの手引きについて記されている。

■　宿営地シティムを出発しヨルダン川へ向かう（3:1-6）

3章に入り、ヨシュアはイスラエルの人々と共にヨルダン川の岸に着き、川を渡る前に三日野営する（3:1-2）。そこで示されるのが「契約の箱」をレビ人（祭司）に担がせ、その後に続くこと（3:3-4）、である。※「契約の箱」とは、十戒の石版二枚が納められており、神の臨在（共におられる）の象徴とされたもの。「二千アンマの距離」（3:4）は900㍍。なかなか遠いが、「契約の箱」の神聖さの表れであろうか。そして「あなたたちの行くべき道は分かる」（3:4）とは、「ただ主に聞き従えば行く道は示される」とのメッセージのように感じる。

「聖別」（3:5）とは、神ご自身がなさる業の場合（出31:13、レビ20:8など）と人間の選び取りの場合（出20:8など）がある。後者に際しては「人が神への奉仕に献身し、神の聖なる人格を生活に反映するに至る過程」（『新共同訳聖書辞典』）との説明あり。これから約束の地に入っていく大事業を前に、自ら「身を清める」儀式と心備えを行うようにとの命令であろう。

6節の契約の箱の文脈にて、「民の先に立って進んだ」との記述からは、出エジプトの「昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった」（出13:22）出来事を彷彿とさせる。

■　ヨシュア、渡河を目前にして最後の指示を与える（3:7-13）

7-8節は主がヨシュアのリーダーシップを激励する場面。偉大な指導者モーセからその役を受け継いだヨシュアの心境やいかに。さぞかし不安も大きかったことであろう。そんなヨシュアに主は「モーセと共にいたように、あなたと共にいる」（3:7）と告げ励ますのである。これはまた、ヨシュアをリーダーとしてイスラエルの人々に認知させる大いなる保証でもある。そうしてヨシュアは「主の言葉を聞け」（3:9）と臆せず語るものとされる。

彼が民に告げる内容は次のことである。

✧　生ける神があなたたちの間におられる（3:10）
✧　カナン人、ヘト人、ペリジ人、ギルガシ人、アモリ人、エブス人を完全に追い払ってくださる（3:10）
✧　主の契約の箱があなたたちの先に立ってヨルダン川を渡って行く（3:11）
✧　各部族から一人ずつ計12人を選べ（3:12）

✧　契約の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、水がせき止められ、川の水は壁のように立つ（3:13）

■　ヨルダン川の流れ、せき止められる（3:14-17）

「春の刈り入れの時期」（3:15）とあるが、エリコ付近では4月末、ヘルモン山の雪解け水が勢いよくヨルダン渓谷を流れる。この時期農夫たちは大麦の刈り入れをする。

川の水が「壁のように立った」（3:16）は、出エジプトの際の《葦の海》の水が「彼らの右と左に壁のようになった」（出14:22、29）を思い起こさせる。こうしてイスラエルは、出エジプトの奇跡を追体験するわけであるが、これをもってしても、モーセの後継者としてのヨシュアの姿が鮮明に語られている。

（聖書教育より）

「各部族の代表者 12 名が選ばれ、堰き止められた川の川底から、石を抱え、それを肩に担いで対岸に渡ることが、あらかじめ命じられます（4:1-9 参照）。それこそが、後々神のみ業の記念となり、後の世代へのしるしとなるのです。本来、ここにあるはずが無い『川底の石』が、なぜここにあるのか。人間の業の及ばない神の計らいと恵みとだけが、私たちの道をつくったのではなかったか。このことを忘れない。それがイスラエルの民の社会づくりや教育の根幹に据えられるべきだったのです。」（聖書の学び～見失った「記念」）

→この「人間の業の及ばない神の計らいと恵みとだけが、私たちの道をつくったのではなかったか」という言葉に感銘を受ける。信仰者として、また信仰共同体としての歩みは、主の先導、主の言葉に従う歩みであり、道無きところに道を通して下さる主の計らい恵みを数える歩みである。「神のもの」として自らを「聖別」して従う者へ、今課の学びから示されるメッセージである。